

平成 29 年度丸亀市文化講演会 まるがめ文化芸術祭 2017 特別事業

「アートなんて役立たず？」レポート

京都造形芸術大学

アート・コミュニケーション研究センター 専任講師

岡崎大輔

「アートなんて役立たず？」このいささか挑戦的な問いは、本センター所長の福のり子が、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（以下 MIMOCA）より招かれ、丸亀市内外の参加者約 100 名を対象に行った講演会のタイトルである。福がこのタイトルをつけた背景は、日本の人々の「アートばなれ」にある。たとえば、日本の美術・博物館の年間入館者数は横ばいにあるが、館の総数は年々増加しているため、実質的には減少している。また、過去に本学アートプロデュース学科（以下 ASP 学科）の学生が、京都市内で 500 名を対象に行った街頭調査では、「美術館に行ったことがありますか？」という質問に対して、約半数が「一度も行ったことがない」あるいは「ほとんど行ったことがない」と回答している。

数十年間、キュレーターとして世界各地で展覧会を企画し、また、大学教員として日本各地で鑑賞教育を行ってきた福は、鑑賞者を育てることがいかに重要かを訴え続けている。今回の講演会では、先に述べた「アートばなれ」が起こっている現状を踏まえ、なぜ鑑賞教育が重要なのか、アートは本当に役立たずなのかを、問い直す機会となった。以下、講演をレポートする。

福はまず、アート作品とアートが異なることを示した。アート作品は基本的に「モノ」、一方アートは作品とみる人の間に起こる不思議な現象、深淵で興味深いコミュニケーション、「コト」なのである。福はこれを、「投げ手」だけではなく、「受け手」なしでは成立しないキャッチボールのようなものだと述べた。アートが生まれるには、作品に意味を見出し、さまざまな価値を付加することのできる「受け手＝鑑賞者」の存在が不可欠だからだ。ところが、これまでの美術教育は「投げ手＝制作者」育成に重きを置いてきた。その結果、絵が上手くかけない子どもたちは、アート嫌いになってしまう。ちなみに、多くの子どもたちが、美術の授業は現在も、そして将来も役立たないと考えているという調査結果もある。こうした子どもたちは成長しても、美術館に行こうとはなかなか思わないだろう。

しかし、本当にアートは役立たずなのか？福は鑑賞教育という観点から、決してそんなことはないと述べた。以下が、作品を鑑賞することで身につく力である。

アート作品を鑑賞することによって身につけられる力

① 知的探究心

多くのアート作品には、平易さと不可解さの両方を感じさせる要素が含まれている。「不可解さ」とは作品から発せられた「問い」でもあり、鑑賞者を素通りさせない「仕掛け」でもある。こうした作品の要素が鑑賞者の知的探究心を刺激する。

② 目的意識をもった観察力

鑑賞者は、作品から投げられる問いに応えるため、自らの知識や経験を総動員して考えようとする。そんな時は、漠然とみているときよりも、はるかに目的意識をもった観察力が求められる。

③ 正解のない問いに取り組む力

正解が一つとは限らないアート作品を読み解くためには、自ら考え、自分なりの答えを導き出す力と同時に想像力が必要となる。

④ 創造的解釈 ⇒ 奥深い意味を読み解く力

アートは「そこに存在しないなにかを、そこにみる」という創造的な活動でもある。木を木、布を布としてだけみないからこそ、立ち上がってくる、なにかがある。作品鑑賞は、物事の背後にある、奥深い意味を読み解く行為なのだ。

⑤ 体系的・論理的な思考力

アート作品は比喩の宝庫だ。なにかの象徴や主張であり、ときには概念である可能性もある。そうした複雑さを読み解くためには、目だけでなく、思考力を駆使して体系的・論理的にみる必要がある。

⑥ より適切な言葉を、より適切に組み立てる言語能力

私たちの脳は、何かを目にした瞬間からそれを言語化し、分類し始める。一筋縄ではいかない複雑な要素を含んだアート作品を理解するためには、普段以上の言語能力が求められる。

⑦ 他者を理解したいというコミュニケーションの基礎力

アート作品に含まれる不可解な要素は、作者、つまり、自分とは異なる他者の感情や価値観の表れでもある。それらについて考えることは、とりもなおさず、他者を理解したいという気持ちの芽生えを意味する。

⑧ 人間関係の基本である多様性の受容 ⇒ 他者と生きていくための基礎力

アート作品は、たとえば、楽しそうでありながら悲しそうであったり、暖かそうでありながら冷たそうでもあったり、相反するどちらの印象も抱かせる。そのため、鑑賞者が作品からなにを受け取っても間違いとはいえない。つまり、アート作品の前では、鑑賞者の立場は平等になる。鑑賞者は対話を介して作品を鑑賞することで、人間関係の基本である多様性の受容、すなわち、他者と生きていくための基礎を学ぶ。

⑨ 自己対話力

アート作品はときとして、みる人の鏡になる。「この作品は素敵だ」と思ったとき、それは正確に言えば「この作品は素敵だと、私が思った」ということだ。アート作品を通じてみているものは、実は自分自身の価値観。だからこそ作品をみることで自己対話力が身につく。

これら 9 つの力は、中央教育審議会が唱えている「生きる力」、すなわち「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力、自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる力」にほかならない。

朝日新聞に掲載された（※）、AI を東大受験させるプロジェクトに関する記事によると、AI は 80%以上の確率で難関私立大学には合格可能だが、東京大学には合格できないことが予測されている。その理由は、東大入試では、決まった正解がなく物事の意味を問われる問題が多数出題され、そうした問題に AI が対応不可能なためだ。「意味の理解」は、私たち人間にしか備わっていない能力なのだ。2030 年には現在のホワイトカラーの仕事の半分以上が、AI に置き換え可能と予測されている。「みなさん、どうか『意味』を理解する人になってください。それが AI によって不幸にならない唯一の道だから」、記事はそう締めくくられていた。

ASP 学科では、主体的な鑑賞者、また、著しく変化する社会でも、人間として主体的に生きられる能力を持つ人材を育成するため、対話型鑑賞教育プログラム ACOP / エイコップ (Art Communication Project) を行っている。ACOP とは、鑑賞者同士のコミュニケーションを通して、アート作品を読み解いていく鑑賞方法である。知識や情報だけに頼らず、「みる・考える・話す・聴く」という 4 つの能力を、普段より意識的に使うことを提唱している。ASP 学科の学生たちは、ACOP で 1 年間かけて作品をみる訓練を受け、先に挙げた 9 つの力を養っていく。以下は、1 年間の授業を受けた学生たちの言葉だ。

*** 答えのない問いに対して、答えがないからこそ考えることを学びました。そして、考え続けていく中で「答え」を導くことはできなくても、その中でたくさんの「発見」に出会えることに気付きました。**

*** 一人でみているだけでは 10 人分の発見はできない。一人でみたら、自分の思う範囲までしか歩いていけないけれど、ACOP のようにコミュニケーションを用いて他者とみたら、今まで行ったことのない所まで飛んでいける。**

*** 作品から気付かされ、他者から気付かされ、そして時には、自分の気がきが他者の気を引き起こしていく。**

学生たちは、作品鑑賞だけではなく普段の生活でも、立ち止まって物事の意味を考えるようになる。「わからない、だから興味がない」ではなく「わからない、だから興味がわく」と考えるようになり、自主的に知る努力も始めていく。また、学生たちは自分と他者との関係性にも目を向け、違うことを恐れるのではなく、それらを受容し活かすこと、さらに、違うからこそ他者を思いやるのがいかに大切か、徐々に理解していってくると福は述べた。

ここまでの内容をご覧いただくと、ACOP が鑑賞教育の枠組みにはおさまりきらないことをご理解いただけるだろう。ACOP は「コミュニケーションを介した鑑賞教育」であり「鑑賞を介したコミュニケーション教育」でもあるのだ。こうした考えのもと、学外にも取り組みを普及させるため、福は 2009 年に本

センターを設立。専門の異なるメンバーが集い、現在は美術・博物館をはじめ、学校教育、企業、行政・NPO、他機関との共同研究など、多領域で ACOP を応用したプログラムを実践・研究している。

たとえば学校教育では、小中高校と連携し、美術はもとより理科や社会、国語など、あらゆる教科への応用を行っている。また、筆者が専門とする企業内人材育成では、新入社員から管理職を対象とした各階層別研修のほか、セルフラーニング、ダイバーシティ、チームコミュニケーションといったテーマ別研修など、応用範囲は多岐にわたっている。

さて、冒頭の問いに戻りたい。「アートなんて役立たず」なのだろうか。決してそうではないと感じていただけはずだ。福は講演会を「アートとは、みることから始まる疑問、そして発見と驚き。これらはすべての学びにも通じる大切な事柄である」と締めくくった。

講演会終了後は、MIMOCA の職員、および市役所の人たち等約 20 名とのディスカッションが行われた。どうすれば、もっと市民に利用してもらえる美術館にするかをテーマに、展覧会企画や美術館運営、特に教育普及について、ざくばらんに話し合う機会であった。熱のこもったディスカッションの締めくくりとして、福は以下の言葉で、集まってくださったメンバーにエールを送った。

Try again , fail again , and fail better

(もう一度挑戦しよう、失敗もオッケー、ただし、次はちょっとだけましな失敗をしよう)

ACOP
ART COMMUNICATION PROJECT

※新井紀子 2016 年 11 月 25 日 「AI の弱点は意味の理解」朝日新聞